

汪精衛の日本観（1904年～1925年）

檜 山 京 子

1. はじめに

南京の中山陵を訪れた際、汪精衛の墓をさがした。中山陵の南側にある小さな丘だと聞いていたのだが、とうとう見つけることができなかった。それもそのはずで、売国奴として国民の誹りを受けながら死んでいった汪精衛の墓参を、正々堂々とするものなどあるはずがなく、中山陵のように観光客も訪れはしない。それどころか、汪精衛の墓は、1946年に何者かによって暴かれ、爆破されてしまったのである。

汪精衛の生きた時代は、中国国内においては、辛亥革命によって、三百年近く続いた清王朝が倒れて中華民国が成立し、国際的には、第一次、第二次世界大戦をが起こった動乱の時代だった。

汪精衛は、1883年広東で生まれた。1904年、清国の官費留学生として日本に渡る。日本では、法政大学の速成科に在籍した。1905年、同盟会に加入。孫文らの革命運動に同調して、《民報》の主筆となる。1910年、北京で摂政王戴溥の暗殺に失敗し、逮捕されるが、翌年の辛亥革命で釈放。以後孫文の下で革命運動に従事する。1925年孫文死去の際には、遺書を起草する。孫文死後、広東国民政府主席に就任。蒋介石との国民党内の権力闘争に、巻き込まれる。1931年、満州事変が起こり、これ以降対日政策をめぐって、共産党や、蒋介石と激しくぶつかることになる。1935年、国民党四期六中全会の開幕記念写真の席で、銃で撃たれ重傷を負う。1938年、日本との交渉を巡っ

て、蔣介石と意見が対立したため重慶を離れ、ハノイに逃亡。個人の身分で、対日和平運動を始めようと試みる。しかし、日本との交渉はうまくゆかなかつた。汪精衛は、救国の心を抱いていたが、逆に中国の国民に国を売る売国奴(漢奸)と罵られながら、失意のうちに、1944年日本の名古屋の大学病院で死去した。

最近中国でも、汪精衛に関する論文が次々に発表されている。北京師範大学の蔡徳金先生は、中国の汪精衛研究者では第一人者であると思う。先生は多くの資料を使って、広い視野で汪精衛とその側近たちを観察していらっしゃるのだが、汪精衛グループの行為は、“和平運動”か“売国行為”かという大きな問題に関して、その結果から見ると、やはり“売国行為”であり、日本人の口から「あれは、愛国和平運動だ。」と言われることには、大きな反発を覚えるということであった。“漢奸”というレッテルの壁はやはり厚い。

この論文で私がテーマに選んだのは、1904年から1925年の汪精衛の日本観である。中国では、この時期の汪精衛は、孫文の弟子である革命家の愛国青年として、高く評価されているが、その一方あまり研究されていない。

1904年は、汪精衛が日本に留学した年である。当時多くの中国人が、明治維新による近代化を学ぶために日本に渡った。汪精衛は明治維新をどのように評価していたのか、手記などをもとに調べる。

1925年は、孫文が亡くなった年である。孫文の死は汪精衛にとって大きな人生転換のきっかけであった。これまで孫文の意向の通りに働いてきた汪精衛は、このときから自分の判断で行動しなければならなくなったのである。日本との関係、ソ連との関係も転換期にあり、国内、国際ともに複雑な時期であった。当時汪精衛はどのような日本観を持っていたのであろうか。

また汪精衛の日本観に大きな影響を与えた孫文は、どのような日本観を持っていたのか孫文の講演や、書簡をもとにして調べる。

2. 明治維新の評価

汪精衛が清国の官費留学生として日本にいた1904年から1907年は、日本における中国人の数がピーク達した年である。彼らの来日目的は、日本の明治維新を見習って中国に西洋の文明を取り入れ、祖国の近代化を推進することであった。

1941年に、汪精衛は《正月の回憶》で日本留学時代を回想してこのように述べている。

“その頃私がもっとも傾倒していた日本の偉人は、西郷隆盛と勝海舟だった。もしこの二人がいなかったら、江戸事件の解決はもちろん、明治維新もスムーズに行かなかったのではないかと思う。私は神田あたりの書店にゆく度に、必ずこの二人の偉人に関する本をさがした。日曜日には上野公園へゆき、西郷の銅像を飽くことなく眺めていた。”

汪精衛も例外でなく、訪日した当初は、日本の明治維新を手本にして、中国を近代化させようと考えていた。

当時の在日中国人の目的は、皆同じく西洋の進んだ文明を取り入れ、中国を近代国家にする事だった。しかし近代化を進めるにあたって、清朝の統治下で憲法を作って民主主義体制で行うべきだと主張するグループと、まず清朝を転覆してからそれを行うべきだと主張するグループに分かれて激しく論争していた。前者は康有為、梁啓超等を中心とし、立憲派と呼ばれ、後者は孫文、黄興等を中心とし、革命派と呼ばれた。

汪精衛は、黄興や訪日した孫文との出会いを通じて、革命派の考え方に共鳴し、革命派の機関誌《民報》の主筆メンバーの一人となった。彼は、《民報》第1号の《民族と国民》の中で、満州民族の王朝を倒して、漢民族の支配を復活させてから、立憲政治を行うことを主張している。《民族と国民》の中で、汪精衛が日本の明治維新と、中国革命の違いを説明していると思われる箇所がある。

“もし同民族の政府でその専制政体に問題があるだけなら、これに対しては

国民主義をもって、その政体を転覆すれば目的は達せられる。しかし今のように政府が異民族政府であり、しかも専制政治を行っている場合は、異族を駆逐するのが民族主義の目的であり、専制を転覆するのが国民主義の目的である。民族主義の目的を達してからでないと、国民主義の目標は達することができない。”

これを日本に当てはめると、“同民族の政府でその専制体制に問題がある”というのは、江戸幕府のことで、その体制の転覆とは、すなわち明治維新のことである。汪精衛は日本の明治維新は同民族という条件の下で成功したのであり、中国で日本と同じように維新を成功させるためには、まず異族を駆逐しなければならないと主張するのである。中国を近代化させ、民主主義を行うことが本来の革命の目的だったはずであるが、民族問題のみしか目に入らなくなってしまった汪精衛は、清朝皇族の暗殺を企て、逮捕されることになるのである。

民族問題はさておき、汪精衛の明治維新に対する評価は、非常に高く、それを模範にして中国革命を行おうと考えていたことは確かである。汪精衛は、1908年《申論革命决不致召瓜分之禍》(中興日報1908年8月)に、このように記している。

“日本の民党が幕府を倒そうとしたとき、フランスの皇帝ナポレオン3世が、日本の幕府に、フランスの兵を借りて、内乱を平定する意志があれば協力すると、密かに告げたことが伝わると、民党が怒りを倍増させただけでなく、中立の立場をとっていたものまで民党に味方し、幕府の参謀までが、陰で民党を助けるようになったので、幕府勢はますます孤立してしまい、民党に投降せざるを得なくなった。日本の民党の外国の干渉者に対する態度は、このように賢く感心すべきものだった。”

後に日本という外国の後ろ盾を得て、南京に政府を作った汪精衛であるが、日本留学当時は、外国の内政干渉を拒んだ、“日本の民党”の対応を高く評価しているのである。

当時、汪精衛の思想にもっとも影響を与えた人物である孫文も、明治維新を高く評価していた。孫文は1923年、中国革命への援助を要請するため、犬

養毅に宛てた書簡で、

“あの日本の維新は、実に中国革命の原因でした。中国革命は実に日本維新の結果なのです。二者はもともと一貫したもので、東亜を復興するものです。”（板橋望氏訳）と述べている。

3. 汪精衛の日本観（1904年～1925年）

《汪精衛自叙伝》（1941年）に、次のような日露戦争に関する記述がある。

“日露戦争が勃発したとき、中国人民のすべてが願ったことは、日本の勝利であった。・・・中略・・・私の日本留学当時、東京にいた中国人は一万を遙かに越えていたのだが、それが一人残らず日本を心から支持していたのである。”

当時中国では、ロシアが満州からの撤兵を拒否したため「拒絶俄（ロシア）運動」が興っていた。汪精衛は、1908年《民報》に“真っ先に侵略の野心を發揮したのはロシアである。よって、最も仇敵として抵抗すべきなのは、ロシアなのである。”と記している。中国国内ではロシアに対する反発が世論の中心であった。このような状況下で、アジアの小国日本がロシアに勝利したというニュースは、中国の人々を喜ばせたのであった。

日露戦争時期、汪精衛は日本の勝利を聞いて、心から喜び、日本はアジアの小国ながら挙国一致して、国力の増強を図っていると深く感心していた。《申論革命決不致召瓜分之禍》（1908年《中興日報》）で、汪精衛は当時の日本の状況を次のように語っている。

“日本は中国と隣接していて、中国同様ロシアの侵略を受けやすいので、それを憂慮して力を蓄えている。・・・日本はついに奮い立って、朝鮮を制御し、遼東半島を割譲させてロシアの盾にしようとしたが、三国同盟の圧迫を受けて、意志を遂げることができず、却って、ロシアが他人の力を借りて、清朝に恩を売り、悠々と満州を奪い取る羽目になってしまった。・・・日本はこれを憂慮し、全力で戦備を整え、ロシアと生死を決しようとして、挙国一致、

臥薪嘗胆した。”

日露戦争直後の汪精衛の日本観はこのようだった。この論文から、汪精衛の日本に対する敵対心は感じられない。汪精衛は、日清戦争で日本が朝鮮、遼東半島に進出したのは、ロシアに対する危機に備えるためであって、自己防衛のためのやむを得ない行為であったという。そればかりか、日清戦争の勝利によって日本が取得した朝鮮、遼東半島の利権を、三国干渉によって清国に返還させられたことについては、同情的な見方さえしているのである。

ところが以下に挙げるのは、1920年の論文である。1908年の時点では日本に好意的だった汪精衛が、1920年に記した《パリ講和会議と中日問題》では、激しく日本を批判している。

“日本はその生存のために東アジア諸国の生存を顧みず、それを犠牲にした。日本とロシアは、どちらも人類共存主義の敵なのである。”

1908年の論文で“最も仇敵として抵抗すべき”だと述べたロシアと共に、日本は人類共存主義の敵だと汪精衛はいう。汪精衛は、なぜこのように日本を仇敵と考えるようになったのであろうか。

1908年の論文で汪精衛が、日清戦争後の三国干渉で、日本が朝鮮と遼東半島の利権を失ったことに、同情を寄せていたことはすでに述べた。日露戦争の勝利によって、日本はその利権を取り戻した。その後朝鮮は“日本の保護国になって亡国の憂き目を見る”ことになり、遼東半島における日本の蹂躪は“ロシアの何億倍もきつい”ものであった。この結果をみて、日本が朝鮮、遼東半島に進出したのは、自らの生存のための、やむを得ぬ自己防衛ではなく、ロシアと同じ明らかな帝国主義的侵略行為であったのだと気づき、汪精衛は日本に対する認識を変えるようになったのである。

4. 孫文の日本観

上記のような汪精衛の日本観の変化に、直接大きな影響を与えたのは孫文だった。汪精衛は自らを孫文の忠実な弟子であると称しているように、彼は孫文の意志に従って中国の革命運動に貢献し、孫文の死に際しては、その遺

書を起草するなど、孫文に最も近い位置にいた。そこで汪精衛の日本観の変化についてさらに詳しく知るために、孫文の日本観の変化を調べることにする。

「大アジア主義」という言葉があるが、孫文の日本に対する基本的な感情は、欧米諸国に対抗して、アジア全体の発展を願う、孫文独自の「大アジア主義」的感情であった。1913年、孫文は日本の華族会館での講演で次のように語っている。

“私は日本が努めて中国の養育をはかり、中国と提携してくれることを希望する。・・・日本はアジア最強の国であり、中国は東洋最大の国である。もしこの両者が互いに提携できれば、東洋の平和のみならず、世界の平和もまた維持しうることは、疑問の余地がない。”

この講演は、孫文が日本に提携を呼びかけたものである。しかし、孫文の熱心な提携の呼びかけにも関わらず、日本は、1914年第一次世界大戦が始まると、中国の山東に進出し、1915年袁世凱政府に二十一箇条の不平等条約を突きつけた。

1915年、《上原勇作との談話》で孫文は、驚くべきことを言っている。

“横暴な袁世凱の専制政治を打倒して、全国民が支持する革命新政府が成立し、中国と日本の結びつきの実際効果をおさめるために、日本が少なくとも予備役将兵と武器で三個師団を編成して中国革命を支援してくれるのなら、中国新政府は東北三省、満州の特殊權益をすべて日本に譲与してもよい。・・・しかし、私孫中山ははっきり声明する。東北三省は中国の領土である。我々は固有の主権の保護を固く決意しており、寸土といえども侵略は許さない。”

孫文は、日本が革命に援助するなら、領土は渡さないが、東北三省の特殊利権を譲ってもよいと言っているのである。袁世凱の、外国に媚びる売国政策を批判する立場の孫文が、ここまで譲歩するということは、彼が如何に日本に期待を寄せていたかがわかる。

ところが、日本は北洋軍閥に莫大な借款援助を行い、孫文の期待は裏切られることになった。

1917年、孫文は寺内正毅に宛てた書簡で、日本の中国軍閥に対する援助が、人民の憤怒を招いていると指摘し、正義をもって誰を助けるべきか定め

るようにと勧告した。しかしこの電報も、結局日本の中国軍閥への援助をやめさせることはできなかった。

一方1917年、十一月革命が成功したソ連は、中国に対する一切の条約と権利の放棄を宣言し、中国に友好を呼びかけた。孫文は革命で新しく生まれ変わったロシアに目を向け始める。

1919年、朝鮮で三・一独立運動、中国で五・四運動が相次いで起こった。これらの民族運動は日本の軍国主義、帝国主義にその矛先を向けたもので、中国国内の排日感情は高潮に達していた。これらがきっかけになって、孫文の日本観は、大きく変化していった。

1919年4月、孫文は日本の新聞記者大江に“日本人はアジア人ではない”と言った。大江が愕然としてその故を質すと、孫文はこう答えた“日本人は欧米人の手先になって、我がアジアを侵略するものである。アジア人と見なすことができようか！日本人がもしアジア人と称したいなら、満州の権利と、山東半島を直ちに中国に還付し、朝鮮の独立を認めることだ。・・・”

これまで日本には提携を呼びかけ、軍閥のアジア諸国に対する侵略行為を、それほど非難しなかった孫文は、1919年朝鮮と中国の排日民族運動をきっかけに、ついにあからさまに日本の日本の帝国主義的侵略を非難し始めたのである。

重光葵の手記『孫文を偲ぶ』の中にも、孫文の日本の軍閥に対する激しい非難の態度が書かれている。1921年重光が、孫文と対談した折、“彼（孫文）は日本軍閥を罵り、日本が支那に対する侵略政策を中止し、反省せねば、如何に日支親善を説くも、無駄であるとして、数十分に亘りて、激越なる口調で論じ立てた。”重光が、日本の真の意志、及び政策は、孫文の言うような軍閥の政策ではないと主張すると、孫文は“帰って田中中将（義一）に聞いて御覧なさい。彼は多くのことを知っている。自分の言うたことを裏書きするだろう。”と答えたという。（『孫文を偲ぶ』中国研究月報487号）

孫文は1925年3月他界したが、その直前の1924年11月28日神戸で《大アジア主義》の演説をしている。この時、孫文はすでにソ連との提携を始めていたが、まだ日本との提携を完全に諦めたわけではなかった。この神戸で

の演説は次のような言葉で結ばれている。“あなたがた日本民族は、欧米の覇道文化を取り入れているのみならず、またアジアの王道文化の本質をももっています。今後世界文化の前途に対して、いったい西洋の覇道の走狗となるのか、それとも東洋王道の守護者となるのか、それはあなたがた日本国民がよく研究して慎重にえらぶべきことであります。”

5. 終わりに

1925年孫文は日本に対して“西洋の覇道の走狗となるのか、それとも東洋の王道の守護者になるのか、”選ぶようにとメッセージを残して他界した。このメッセージは、日本のアジアへの侵略を非難するでもなく、友好を呼びかけるでもなく、そのどちらをもし尽くした孫文の、日本に対する最後のメッセージだった。

汪精衛の日本観を、孫文の日本観と一緒に見ると、その変化の理由がうなずける。日本に留学していた当時は、日本との提携を心から期待していた汪精衛も、1920年《パリ講和会議と中日問題》の論文で激しく日本の軍国主義を非難した。孫文死去の時点で、彼は日本を“裏切り者を援助し、国内を混乱させて漁夫の利を得ようとする侵略者”と見なして憎み、ソ連に期待を寄せるようになっていた。日本人を信用していなかった汪精衛は、孫文が病床にある際、孫文の周辺から日本人を遠ざけようとしたという。満鉄上海事務所嘱託職員山田純三郎の見た孫文を描いた『仁あり義あり、心は天下にあり』（保坂正康著）に、次のようなエピソードがあった。孫文が末期の肝臓ガンで北京のロックフェラー病院に入院していたときのことである。“このロックフェラー病院に犬養毅が派遣した医師が訪れたことがある。大連の満鉄病院長であった。しかし、孫文に付き添っていた汪兆銘は、「日本人医師には診せられない」とはねつけた。・・・汪兆銘は、孫文の周囲から日本人をしだいに遠ざけ始めた。”

これほど日本人を信用していなかった汪精衛であるが、その晩年は、日本との和平交渉に失敗し、名古屋の大学病院で、最期を看取られることになっ

た。汪精衛は名古屋の病院の医師や、看護婦に厚い信頼を寄せて、その看護に深く感謝していたという。

孫文死後の、汪精衛の日本観の変化をたどることは、日本と中国をはじめとする世界の歴史をたどることであり、非常に大きな作業である。それは私のライフワークになるであろう。私は汪精衛という混乱の時代に生きた偉大な人物と、これからもずっとつきあってゆくつもりである。

参考文献

- 『中国人の日本観 100 年史』小島晋治・伊東昭雄・光岡玄・板垣望・杉山文彦・黄成武 共著 自由国民社発行 1976 年
- 『汪精衛自叙伝』安藤徳器編訳 大日本雄弁会講談社発行 1941 年
- 『汪兆銘』森田正夫著 興亜文化協会 1939 年
- 『和平は売国か・・・ある汪兆銘伝』山中徳雄著 不二出版 1990 年
- 『汪兆銘全集 第 1 集』河上純一訳 東亜公論社 1939 年
- 『同生共死の実体・・・汪兆銘の悲劇』金雄白著・池田篤紀訳 時事通信出版社 1960 年
- 『日中戦争裏方記』岡田酉次著 東洋経済新聞社 1974 年
- 『孫文の革命運動と日本』俞辛焯著 六興出版発行 1989 年
- 『大アジア主義の歴史的基礎』平野義太郎著 河出書房 1945 年
- 『孫文の研究・・・とくに民族主義理論の発展を中心として』藤井昇三著 勁草書房 1966 年
- 『孫文・講演「大アジア主義」資料集』陳徳仁・安井三吉編 法律文化社 1989 年
- 『現代中国と孫文思想』安藤彦太郎・岩村三千夫・野沢豊編 講談社 1967 年
- 『国父孫文と梅屋庄吉』車田譲治著 六興出版 1975 年
- 『仁あり義あり心は天下にあり』保阪正康著 朝日ソノラマ 1992 年
- 『いま日本と中国を考える・・・日中比較文化論』神奈川大学人文研究所編から (『日本の近代化と中国革命』小島晋治著) 神奈川新聞社出版局 1989 年
- 『中国の眼・・・魯迅から周恩来までの日本観』玉嶋信義訳 弘文堂 1959 年
- 『日本留学精神史』巖安生著 岩波書店 1991 年
- 『留日学生の辛亥革命』小島淑男 1989 年
- 『蒋介石秘録 上・下』サンケイ新聞社著 サンケイ出版社 1985 年
- 『ドキュメンタリー中国近代史』横山英著 亜紀書房 1973 年
- 『中国近現代史』小島晋治・丸山松幸著 岩波新書 1986 年

『標準世界史年表』 亀井高孝・三上次男・林健三郎編 吉川弘文堂 1962年

《汪偽政權資料選編 汪精衛国民政府成立》黄美真・張云編 上海人民出版社
1984年

《汪精衛評伝》蔡德金著 四川人民出版社 1988年

《汪精衛生平紀事》蔡德金・王昇編著 中国文史出版社 1993年

《汪精衛伝》聞少華著 吉林文史出版社 1988年

《中国近代史》徐・趙矢元主編 遼寧人民出版社 1982年

《中国近代史 上・下冊》林增平著 湖南人民出版社 1958年

《中国現代史 上・下冊》王檜林主編 高等教育出版社 1988年

《中国現代史 上・下冊》北京師範大学歴史系 中国現代史教研室編 北京師範大
学出版社 1983年

《近代中国留学史》（影印本）上海文化出版社 1989年

《民国叢書 第四編 汪精衛集（第一卷～第四卷）》汪精衛著 上海書店

《孫中山外集》

《孫中山選集 上・下冊》人民出版社（北京新華書店）1956年

《民報》（精裝八冊）中国国民党中央委員会党史史料編纂委員会（台湾）1969年

《自述》（東方雜誌 第31卷 第1号）汪精衛著